



光に遇う

本願寺派 布教使 西原 祐治

元旦がんたんのことです。妻つまが「珍しい人めずらしいひとから年賀状ねんがじょうが届とどいています」と言いました。

その年賀状は八年前にお浄土じょうどへ往いった父から、私にあてられた年賀状でした。実は、この年賀状は私が出したものでした。

正月しょうがつを迎むかえる一週間前のことです。来年は何を大切にして過すごそうかと考えていた時、「そうだ、大切な言葉を、父からの年賀状という形にして自分に届けよう」と思ったのです。そして「珍しい人から……」となったのでした。自分で書いたものではありませんが、書かれています言葉が浄土から届けられたような気持ちになり、とても有り難ありがたい縁えんとなりました。（中略）

おそらく正月に思ったことは、思っただけならば、時の過ぎゆくほどに失念しつねんしていたのだと思います。しかし、父からの年賀状として届いて見ると、大切な言葉

はいつも私の思いの中にあります。

さてその父からの年賀状には「ご報謝ほうしゃの一年を送おくってください。父 正念」とあります。ご報謝とはお礼れいするということです。

しかし、お礼や感謝かんしゃにもいろいろあります。もう三十数年も前のことです。あるご家庭かていに、法事ほうじのご縁をいただいて伺うかがった時のことです。読経どききょうを終え、お茶を飲みながら世間話せけんわなしをしていました。すると家の方が、「今の若い人は感謝という言葉も知らない」と言われます。会話かいわの内容ないようは、個人商店こじんしょうてんであるそのお宅たくに、高校を卒業そつぎょうした一人の若者しゅわうしやくが就職してきました。話の流れの中で「感謝しなさい」と言っただけです。するとその青年から「奥さん、感謝つて何ですか」という言葉が返かえってきたというのです。

私も話題わだいに同調どうちょうして、感謝ということを知っている側がわに立ち「そうですね、そうですね」と相づちを打ちました。その相づちを打つ私の心の隅すみに、感謝の心は良い心、仏さまに近ちかい心という価値判断かちはんだんがありました。

その日、お寺へ帰つてぼんやりしていると突然、仏さまからしられたような感覚かんかくをもつたのです。その感覚を言葉にすれば、「お前は勝手かってだなあ」ということです。何が勝手かといえ、自分に都合つごうがよいと何度でも感謝するが、自分に不利益ふりえきがあつたり都合が悪いことであれば、感謝どころではない。それがお前の現実げんじつではないか、ということです。私の感謝についての浅い理解あさいりかいを言い当てられたような気持ちになり、恥はずかしく思いました。誠にその通りです。私が抱く感謝の心は仏さまに近い心どころか、私という我欲がよく、自己中心じこちゅうしん的な心を一歩も離はなれていないのです。それが私の偽りいつわのない姿すがただったのです。

この我欲によつた感謝ではなく、すでに恵まれていることへの気づきを縁とした感謝が大切です。そして何よりも大事なことは、私の感謝が我欲を一歩も離れていないという気づきも、すでに恵まれていることへの気づきも、ともに阿弥陀さまの智慧ちえのみ光ひかりによつてもたらされるということです。



死に目を背ける私

本願寺派 勸学 内藤 知康

仏教が今ここにいます私にとつての問題だというのは、その通りです。

しかし、今ここにいます私は、過去の私、未来の私と無関係に存在しているのではありません。過去の私を振り返り、未来の私を見すえてこそ、今ここにいます私が明確になるのです。

さて、今ここにいます私は生きています。しかし生きていくということと死ぬということとは切り離すことができません。仏教では、他と無関係にすることだけで独立してあるということはありません。仏教では、あり得ないと考えます。仏教では、親と子とが同年齢であるという言い方がされます。不思議な言葉ですが、その人が親になったのはその子が生まれたからです。つまり、その子が生まれてからの年数と、その子の親になつてからの年数は同じだということ

になります。親と子とが同年齢であるというの、そのことを言っています。親と何かを考える時に、子を抜きにして考えることはできません。

そして、生きていくということと死ぬということとの関係も、どちらか一方だけを考えることはできないという意味で、親と子との関係と同じです。生きていくものは必ず死にます。決して死なないものは、もともと生きていないものです。美しい生け花は生きていますのでいずれ枯れてしまいます。造花は生きていないので決して枯れません。生きていくものは必ず死ぬというのは、逆に言いますと、必ず死ぬからこそ生きていくのです。

仏教では今ここにいます私を問題にして、今ここにいます私は必ず死ぬ身であるからこそ今生きていくのだと考えます。しかも、善導大師が私たちの命を今すぐ消えるかもしれない風の中の灯火にたとえられたように、私の死はいつおとずれて

くるのかわかりません。また、仏教では念死といつて、自分自身の死を念じることが説かれています。念死というのは、私の首を切る刀が振り下ろされ今や首に触れる寸前という状況を、あたかも現実のよう体感することだと言われた先生がおられました。今すぐ死ぬかもしれない私ということを見すえてこそ、今生きていく私を本当に見すえたことになるのです。医師の宣告を受けて、余命いくばくもない私ということを見すえてこそ、余命いくばくもない私ということを見すえてこそ、今生きていく私を本当に見すえたことになるのです。に、今生きていくということの素晴らしさが本当にわかったとの体験談もあるようです。（中略）

命終わつてお浄土に生まれるという教えは、否応なく自分自身の死という現実を目を向けさせるといふ大事なのはたつきがあることを忘れてはなりません。死後の問題を今の自分自身と無関係な問題と考える人は、実は死を今の自分と無関係と考えているのです。



一日生きれば一日念仏

在家仏教協会 初代会長 加藤 辨三郎

お経には、深い深い甚深無量の真理が説かれていているわけですが、一般人には、たとえば『法華経』八巻を読んでその教えを会得するのは容易ではありませんから、『南無妙法華経』と唱えて一緒に帰依する、それが仏・法・僧に帰依することだというのが日蓮聖人の教えであろうかと、私は拝察しているわけであります。

それと同じことで、私どもの場合は『大無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』の三経を読んでそれを会得するといつても、とても商売に明け暮れしておる者には時間的にも余裕がありません。そのために与えてくださったのが念仏であり、如来の大慈悲のほかの何ものでもありません。ですから、

いちばん大切なのは念仏なのであります。

私はこうして生命を八十何年いただいておるわけですが、ありがたいのは寿命を一日いただければ、一日法が聞けるということであります。そして念仏を称えて、念仏を相続して、どなたかにそれを渡していくことができる、縁をつないでいくことができるということです。

その一日を支えるためには、月給を貰わなければならぬ。働かなくてはなりません。したがって働くこともみな念仏を頂戴するためなのであります。念仏を頂戴して、念仏を後輩にバトンタッチするために暮らさせていただいている。

一日でも念仏を称えさせてもらって、それを家内なり、子どもなり、周りの人に波紋をおこして流れを伝えていく、これが我々に与えられた役割なのだと

思うのであります。我々が全部生命絶えたら、念仏も同時に消えてしまします。

ですから、念仏者の立場から申しますと、何が大切かというと念仏であり、念仏が大事だから生命が大事なのであります。

会社もつぶれないように相続したいのも、念仏を相続させたいがため、会社を發展させんがための念仏ではないのです。つまるところ發展するのもつぶれるのもみな因縁所生でして、はやい話いくら経営に注意しろといったって、地震がくれば、あるいは戦争がおくれば、いっぺんにガラガラと崩れていつてしまします。(中略)

そういった、まさに火宅無常の世界に我々は暮らしておるのであります。だからこそ、いっそう念仏のみがまことにおわしますということが、しみじみと実感されてくるのであります。

『阿弥陀経を読む』(佼成出版社)より引用

掲載文字数の関係で、一部を中略してご紹介しています



自分の心に目を向ける

筑紫女学園大学 元学長 小山 一行

私たちは生まれてこの方、さまざま
な知識や経験^{けいけん}を身^みにつける中で、
いつの間にか、人生^{じんせい}とはこういうもの
だ、世界^{せかい}とはこういうものだという、
自分^{自分}なりの考えを作り上げて生きて
います。しかし、それは一つの見方^{みかた}
に過ぎないのであつて、視点^{してん}を変え
て見れば世界はまったく違^{ちが}つたもの
となるということには、なかなか氣
づけません。（中略）

仏教^{ぶつぎやう}でいう「世界」とは物理的
な空間^{くうかん}ではなく、認識^{にんしき}のレベルを
指^さしているということですよ。たとえ
ば「財界^{さいかい}の著名人^{ちやうめいじん}」などといいま
すが、「経済界^{けいざい}」という場所がどこ
かに存在^{そんざい}するということではないで
しょう。経済にかかわっている方々の
思いの中で感得^{かんとく}されている、共通^{きようつう}の
理念的^{りねんてき}世界を「経済界」といって

るのです。「芸能界^{げいのうかい}」とか「教育界^{きやういくかい}」と
かいいうのも同じことです。私たちは人間
ですから、私の住^すんでいる世界は「人間
界^{かい}」ということになります。その私が家
の中に猫^{ねこ}を飼^かつていれば、「人間界に猫
がいる」と見るのが普通^{ふつう}の考えでしょう。
しかし、当^{とう}の猫にとつては、この世界は
「猫界^{ねこかい}」なのであつて、その猫界に人間
がいると見ているのではないでしょう。

仏教が求^{もと}めているのは「転迷開悟^{てんめいかいご}」で
あるといわれます。すなわち、迷^{まよ}いの世
界を離^{はな}れて悟^{さと}りの世界に至^{いた}ろうというの
が仏教の大原則^{だいげんそく}なのですが、それは「迷
いの世界」と異なる「悟りの世界」が
どこかにあつて、そこに出かけていくとい
うことではありません。

身勝手^{みがって}な思いにとらわれて、自分の思
いが満^みたされると有頂天^{うちやうてん}になり、思い
通りにいかなくなるとイライラして他人^{たにん}
を責^せめ、愚痴^{ぐち}をこぼしながら生きている。
そういう堂々^{どうどう}めぐりの状態^{じやうたい}を迷いの世

界^{かい}というのはです。その迷いを「転^{てん}」じる
というのは、迷いが消滅^{しょうめつ}するという意味
ではなく、ものの見方が転換^{てんかん}するという
ことです。仏の教えを学ぶことによつて、
迷いを作り出していたのは自分自身の心
であつたことに気づく時、その身勝手な
自分を包^{つつ}んでいる大きな恵^{めぐ}みの世界を感
じる眼^{まなこ}が開^あけてくるのでしよう。

弘法大師^{こうぼうだいし}（空海^{くうかい}）真言宗^{しんごんしゅう}の
開祖^{かいそ}・八三五年寂^{しやく}の著^あされた
『般若心経秘鍵^{はんにやしんぎやうひけん}』という書物^{しよぶつ}には、
仏法遥^{ぶつぽうはる}かにあらず、心中^{しんちゆう}にして即^{すなわ}ち
近^{ちか}し。真如^{しんによ}ほかにあらず、身^みを捨^すてて
いづくにか求^{もと}めん。迷悟^{めいご}われにあれば、
発心^{ほつしん}すれば即^{すなわ}ち至^{いた}る。

と述べられています。仏教が指^{しめ}し示^{しめ}
す真理^{しんり}は、自分の外に向かつて求^{もと}めていくの
ではなく、私たち自身の心のありようの
中にあるというお示しでしょう。だから、
さとりの道は、外の世界を見ている自
分の心に、目を向けることから始まるの
です。



無常

本願寺派 勸学 内藤 昭文

祭りの華やかさに無常を観るとい
うことはなかなか難しいことでは
う。例えば、満開の桜を見て、「き
れいだなあ」という思いはあるでし
う。しかし、そこに「無常」を観
ることはありません。満開の桜が散
る時に初めて無常を感じます。そ
れが一般的でしょう。祭りの後の寂
しさと無常も、桜が散った時に感じ
るものと同質でしょう。しかし、実
は満開の桜の姿に無常を観ることが
実は盛り上がった祭りに無常を観
ることなのです。

私たち人間も、自分が元気な若
い時に、なかなか人生の無常を観
じることはありません。やがて歳を
とり、自分の歩んできた人生を振
り返る時に、わずかながらでも人
生の無常に思いをめぐらすのではな

いでしょうか。これも、桜が散る時の、
祭りの後の、無常と同じです。私たち
はえてして若い時には仏法を聞こうと
しません。それは若さにまかせて、こ
の若さが永遠に続くと思覚している姿
でしかありません。盛んなる時、その
盛んなることは何等の基盤もないもの
であること、つまり無常であることに気
が付かないのです。（中略）

「盛り上がった祭りを見て、無常を観
じる」というと、なにかしら消極的で、
悲壮なイメージもあります。しかし、
そうではなく、逆に祭りが無常である
ことを観るといことは、その無常な
祭りが今盛大に行われることが有難
いことであり、素晴らしいことだとい
うことになるのです。一夜明けると、こ
の盛りあがった祭りがウソのようになく
なるのですが、なくなったことを寂しく
思い、悲しむのではなく、無常である
祭りが今盛大に行われることを喜ぶこ

とができるのです。この私の命、この若
さが、実は一夜明けると、どうなってい
るか分からない無常なるものであるから
こそ、今まさに生きていることの有難さ
や喜びがあるのです。確かに、予期せ
ぬ死、不条理の死を目の当たりにする
と何かと割り切れぬ気持ちになります。
しかし、そこには必ず何等かの因縁があ
るのです。

『仏弟子に学ぶ』（本願寺出版社）より引用
一部を中略してご紹介しています

平成二十三年より、当西照寺のご
法座ならびに研修会にご出講いただい
ている、大分県中津市法行寺ご住職の
内藤昭文和尚ですが、この度司教か
ら勸学に昇階されました。勸学とは、
学階と呼ばれる教学知識を示す五つの
階位の最上位に位置し、教学を深く
研鑽されて他の僧侶の指導的立場にあ
り、宗門内での教学的問題に対して答
える役割を担う方のことです。ちなみ
に、九州では内藤和尚を含めてお二人
しかおられないはずです。 住職



仏壇じまい

行信教校 校長 天岸 淨圓

「墓じまい」の言葉が一般化し、それに伴う再納骨の量が増大化し社会問題となつている。永代供養なのか遺棄なのか。さらには「仏壇じまい」の語も一般化し始めているようだ。家族の形態、生活環境の変化も理解できるが、宗教全般に対する不信か、確実に敬虔に手を合わせる人が少なくなっている。

先日、新聞の読者の意見欄に「仏壇じまいに賛成」の声があつた。「故人を偲ぶには仏壇でなくても良い。それぞれの偲び方があつても良い」という内容だ。多くの人びとには「仏壇」は「故人」を偲ぶためのものであつて、そこに「仏さま」を拜むという意識は具わつてない。辛うじて仏壇はあるが仏教信者はいない状況と言わねばならない。

我国は仏教国を自称している。しかし「仏さま」を拜むことを忘れた仏教とはいかなるものか。「死者供養」を追いかける伝統仏教、メディアを通じて「金運」「パワースポット」を声高に叫ぶ僧侶、どこにブツダの精神が生きているのか。

親鸞は自身のプライベートを語らなかつた。ただ、残された法語は人びとに強い響きを与える。中でも『歎異抄』の表現は格別と言える。その一つに親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念仏申したること、いまだ候はず。という言葉がある。この言葉だけを聞くと、親鸞は死者供養を厳しく拒絶したかに思われる。だが、親鸞はつづけてそのゆゑは、一切の有情はみなもつて世々生々の父母・兄弟なり。いづれも、いづれも、この順次生に仏に成りてたすけ候ふべきなり。『歎異抄』第五条）と語っている。

親鸞は供養すべきは自分の父母だけではない。もちろん人間だけではない。生きとし生ける全てものにおよぶべきだと言つている。思うに親鸞はどれほど豊かな命のつながりの中で生かされていたのだらうか。「本当に限りない善意と愛情と犠牲の中を生かされて来た」。その実感がなければ出ない言葉である。

仏壇を自身に縁の深い人を偲ぶ場と考へている人びとには、自分がどれほどの命によつて生かされて来たかを感じ受することはむずかしいようである。さらに（中略）「仏壇じまい」の言葉には、自分は「自分で生まれて、自分で育つて、自分で生きてきた。だれの世話にもなつていないし、なりたくない」という強烈な「個」の意識が感じられる。翻つて限りなく豊かな境遇に今日まで育まれ、抱かれつつ生きて来たのかを感じできない生き方に深い悲しみを持つ。やがて自分に訪れる「終われる」日の虚しさを知ることになるであらう。



人生に無駄なものはない

佐藤とよかわクリニック 院長 田畑 正久

若（わか）かろうが年（とし）老（ら）いていようが、健康（けんこう）であろうが、病（やまい）を抱（かか）えていようが、どんな者（もの）でも、選（えら）ばず、嫌（きら）わず、見（み）捨てず、無（むじょう）条件（けん）で救（すく）うのが仏（ほとけ）さまです。その仏（ほとけ）さまの教（おし）えに耳（みみ）を傾（かたむ）けることができるかどうか。それが私（わたし）たちの問（もん）題（だい）です。そのきうかけを、病（やまい）はあたえてくれているのではないでしうか。実（じつ）は病（やまい）が、私（わたし）の「現（げん）実（じつ）」を受（う）け入（い）れるご縁（えん）となっているのです。

もう亡（な）くなられましたが、仏（ほとけ）さまの教（おし）えを深（ふか）くいただかれた藤（ふじ）代（しろ）聰（しやう）磨（ら）という方（かた）が「これからがこれま（き）でを決（き）める」という言（こと）葉（は）を残（のこ）しておられます。自分の過（か）去（こ）を振（ふ）り返（かえ）ると、自（じ）慢（まん）したいこともあるでしう。一（いっ）方（ぽう）で、人（ひと）に言（こと）えないこと、悲（かな）しかった

こと、悔（く）しかったこともあることでしう。しかし、そのことは決（けつ）して無（む）駄（だ）なことではなく、仏（ほとけ）さまの教（おし）えに出（で）あ（あ）い合（あ）うと、自分（自分）が今（き）日（にち）仏（ほとけ）さまに出（で）あ（あ）い合（あ）うためには、それらの事（こと）柄（がら）があつたればこそであつた。いつの間（ま）にか、過（か）去（こ）の諸（もろ）々（ろ）の事（こと）は仏（ほとけ）さまに出（で）あ（あ）い合（あ）うための貴（き）重（じゆう）なご縁（えん）であつた、と深（ふか）くうなづけるのです。

私（わたし）にとつて都（つ）合（ごう）の良（よ）いことも、また悪（わる）いことも、私（わたし）を取（と）り巻（ま）くすべての出来（でき）事（こと）は、「人（にん）間（げん）に生（う）まれてよかつた、生（い）きてきてよかつた」という目（め）覚（ざ）めへの促（うなが）しといふことでしう。そのことに目（め）覚（ざ）め、その世（せ）界（かい）におまかせできる時（とき）、「人生（じんせい）に無（む）駄（だ）なものは何（なに）もなかつた、南（なん）無（あ）弥（み）陀（だ）仏（ぶつ）」といのちを生（い）き切（き）つていけるのです。

現（げん）代（だい）社（しゃ）会（かい）はすこい速（そく）度（ど）で変（へん）化（か）し、そ（そ）の中（なか）で能（のう）率（りつ）、効（こう）率（りつ）を強（つよ）く求（もと）められる環（かん）境（きやう）になつています。そ（そ）ういつた中（なか）で、色（いろ）々（さ）な事（こと）柄（がら）に直（ちよく）面（めん）する時（とき）、世（せ）間（けん）的（てき）な

モノサシや自（じ）分（ぶん）の都（つ）合（ごう）に合（あ）つたモノサシで、善（ぜん）悪（あく）、損（そん）得（とく）、勝（か）ち負（ま）けなどを素（す）早（はや）く計（けい）算（さん）してしまひます。病（やまい）のこともその例（れい）外（がい）ではないでしう。

一（いっ）旦（たん）、自（じ）分（ぶん）の思（おも）いから距（き）離（り）を置（お）いて、「私（わたし）が抱（かか）えたこの病（やまい）は私（わたし）に何（なん）を伝（つた）えようとしているのか」、「この現（げん）実（じつ）は私（わたし）に何（なん）を教（おし）えよう、目（め）覚（ざ）めさせようとしているのか」と考（かん）えていただきたいのです。

仏（ほとけ）さまの教（おし）えは、私（わたし）たちが当（あ）たりまえとしていふことを常（つね）に問（と）い直（なお）させるものなのです。その教（おし）えに出（で）あ（あ）い合（あ）わせていただく時（とき）、病（やまい）を含（ふく）めたあらゆる現（げん）実（じつ）を柔（じゆう）軟（なん）に受（う）けとめ、苦（く）悩（う）は無（な）くなりませんが、苦（く）悩（う）の質（しつ）的（てき）転（てん）換（かん）に導（みちび）かれ、生（い）きて行く方（ほう）向（かう）と勇（ゆう）気（き）がもたらされるのです。

辛（つら）くて、悲（かな）しい毎（まい）日（にち）の日（ひ）暮（ぐら）しの中（なか）にあつて、どうか病（やまい）をきつかけに、人（ひと）生（せい）の中（なか）に出（で）あ（あ）い合（あ）わねばならぬことに出（で）あ（あ）つていただきたいと思（おも）います。そのことが、病（やまい）に悩（なや）む方（かた）に贈（おく）る私（わたし）からのメッセージです。

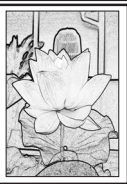


saishoji.info

さいしやうじ
西照寺浄土真宗
本願寺派

第110号 令和8年8月

プンダリーカ

びやくれんげ
—白蓮華—

さとりと救いの世界

本願寺派 布教使 若林 眞人

浄土真宗のお墓では、墓石に「俱会一处」の文字が刻まれていることがあります。これは、お釈迦さまがインドの祇園精舎で阿弥陀仏のお救いをお説きになった『仏説阿弥陀経（小経）』にある言葉です。

説法の聞き手となった長老舍利弗に向かつて、お釈迦さまは最初に西の方角を指し示し、これより西方に、十万億の仏土を過ぎて世界あり、名づけて極楽といふ。その土に仏まします、阿弥陀と号す。いま現にましまして法を説きたまふ。

と説かれました。浄土は広大無辺際、さとりの智慧をもつて見れば無限定の世界

です。それを凡夫に向かつては西方と限定し、聞く人の心にお浄土を刻まれました。

続いて、なぜ阿弥陀仏の浄土を極楽というのか、それは苦の断ちきられた世界だから。その浄土の仏さまをなぜ阿弥陀仏とお名づけるのか。それはいかなる悪業煩惱の身であろうと障りなく救い取つて（光明無量）、阿弥陀仏と同じ無量寿のさとりを得させてくださる（寿命無量）からなのだと。ついで、その浄土の菩薩方のお徳、浄土に生まれたる聖衆の徳を示されました。

その次にお説きになったのが、舍利弗、衆生聞かんもの、まさに発願してかの国に生ぜんと願ふべし。ゆゑはいかん。かくのごときの諸上善人とともに一处に会えることを得ればなり。

という教えです。「お浄土に生まれることを願いなさい。なぜなら、お浄土は仏・

菩薩に会えるところ、さらに先だつて浄土に生まれられた方々と、俱に会えるところだからだよ」と。

浄土を願わせるための凡夫の情を受けて込んだご説法でした。その教えを受けて「俱会一处」の文字がお墓に刻まれることになったのだと思います。そこにはこの文字を刻まれた先人の思いがありますね。

亡きお方がこの世におられた名残であるご遺骨を、お墓に納めて合掌すると目に入るのは「俱会一处」の文字。「あなたは阿弥陀さまのお救いによつて、お浄土の聖衆となられたのですね。掌を合わすこの私も、阿弥陀さまの願いに抱かれてやがて同じお浄土に参らせていただきます。俱に会える世界があつたのですね」

亡きお方を通して、同じ浄土を心に宿す、そんな思いを感じるのです。

『いのちのゆくえ』（本願寺出版社）より引用
※著者の若林先生は、昨年五月二十一日に
行年七十六歳でご往生になりました。 住職



よろこび

本願寺派 司教 山本 攝叡

若い頃は前栽や草花に、全く興味がありませんでした。何時でしか職場に、牡丹の苗を売りに来られたことがあります。初めて自分で、庭に植えてみました。生来の凝り性が出たのでしよう、牡丹に関する本を買って、あれこれ育て方を調べるようになりました。

牡丹はそれほど、手間のかかる花木ではありません。

要点は三つ。五月下旬か六月末までに、下の二つか三つを残し、先の方の新芽を掻き取ります。これを忘れると、ひよろひよろの枝になってしまいます。次は葉っぱが落ちる頃、しっかりと整枝をします。基本の姿勢を整えるのです。最後は二月頃、十二分に肥料を与えます。これさえすれば、力強い枝と、大き

な花を期待できます。

何年か世話をするうち、不思議なことに気づきました。確かに花は美しい。よく世話をされた花には、力があります。けれども花には盛りがないのです。花が開ききったかと思うとその時は、もう衰えが始まっています。一年を通じて牡丹を見ていると、あまりにそれは、あつけないものでした。本当に一瞬たりとも、美しい時は止まっていなかったのです。

世話をして一番楽しいのは、新芽を見る時だと、私は思うようになりました。どんな寒いときでも、それは春の訪れを待っています。赤ちゃんのほっぺのようなみずみずしさです。見事な充実感を持って、冬を過ごしているのです。力強い枝に成長することを願って、充分な肥料を与える好機です。

秋の整枝も楽しみです。葉っぱが黄ばんで、越冬の準備が始まります。来年

の姿を想像しながら、枝が片寄ったり、こずみ過ぎたりしないよう、基本の姿勢を作っておきます。想像をめぐらせながら剪定ばさみを手にしていると、花の咲いている間よりむしろ、充実感があるのです。

自分で世話をして初めて、私はこんな思いに気づかされました。

かつて村上速水和上が、親鸞聖人の「よろこび」について、必ず浄土に生まれることが出来る「よろこび」であるという説明は、おかしいのではないかと発言されたことがあります。未来のことを今喜ぶというのは感情的に不自然であるし、歎異抄を引くまでもなく、われわれは本当に心から往生を喜ぶことなど出来ません。あくまで親鸞聖人が「よろこび」と言われるのは、「いま」遇うことが出来た「よろこび」と見なければならぬと言われるのです。